

# 協会創立八十周年の原点——井下清先生

会長 椎野昌宏

私は本会報に掲載する「花菖蒲の歴史——明治から戦前まで」の記事を執筆するにあたり、昭和五年(1930)創立後、現在までに発行された会報、戦前のもの5冊、戦後のもの37冊を熟読しました。そのなかで旧会長故井下清先生の名前と存在が強く印象に残りました。現在の会員の皆様はほとんど面識もないし、ご存知ないと思いますので、協会の土台を構築された功労者として紹介します。

先生は明治17年(1884)に生まれ、東京高等農学校(現東京農業大学)に入り、造園技術を学びました。卒業後東京市に就職し、都市計画を担当し、公園改良事業や公園緑化事業に務めました。大正12年(1923)に東京市公園課長となりました。その年9月1日に起こった関東大震災の日に、東京市所有の広大な陸軍本所被服廠跡地の空地にたくさんの民衆が避難しました。ところが強烈な熱風が避難民でぎっしりのこの場所を襲い、またた

くまにすべての人々を焼き尽くしてしまいました。死者は3万8千人の多数に及んだといわれています。ところがそこから約2キロ南の清澄公園に逃げこんだ約1万人は、茂っていた樹木が黒コゲになりながらも人々を守ったため生き延びることができました。この事実を目の当たり目撃した先生は、部下とともに死者と瓦礫の処理を黙々と遣り遂げました。そして震災後の東京市復興のため、緑の緩衝地帯を備えた公園を各地に配置する計画をたて、52ヶ所の東京市立公園や、有名な多摩霊園などを築造しました。緑の樹木をふんだんに取り入れた意匠はその後の日本各都市の公園や墓苑のモデルとなりました。

井下先生が現役としてこのように活躍していた時代の昭和5年に、部下の市川政司係長とともに、三好学博士を擁して、日本花菖蒲協会を設立しました。翌昭和6年に発行された会報の創刊号で、先

生は「花菖蒲の復興」と題して、次のように書いています。

「元来此のアイリ

ス種属の花を愛すること深き欧米に日本の花菖蒲は非常に賞賛を博して広く頒布され研究愛養された。我国においては三好博士などこの花の復興宣揚などに努力されたが、笛吹けども立つ者がなかった。昨年米国アイリス協会のリード博士が来日され我が花菖蒲の徹底的研究と品種の蒐集をされたことが強い刺激となり、期せずして各方面より花菖蒲宣揚と栽培の意見勃然として起り、遂に本協会の設立を見たことは歓喜に堪えぬことである。」と述べています。先生は本職の公園事業に関連して、一般人への園芸の普及・啓蒙をはかるため、

花菖蒲以外にも桜の会、梅の会、菊の会、蓮の会などの組織化にも参画したり、日本庭園協会、日本造園学会などの設立などにも指導的役割をはたしました。終戦後の昭和21年(1946)に定年退職した後、国土緑化推進委員会常任委員や首都圏緑化推進常任委員長などを歴任し、母校の東京農業大学の

教授となりました。昭和27年(1952)日本花菖蒲協会が再開したあと、昭和37年(1962)から48年(1973)8月8日89才で逝去されるまで約11年間、協会の会長職を務められました。花守人というペンネームで、会報の巻頭言を書かれましたが、花菖蒲に対する限らない愛情が滲みでたすばらしい名文です。昭和47年(1967)の会報第12号巻頭言の一部を紹介します。「名もない草草で覆われた寂しい湿原に忽然と一斉に莖たかだかと引きでる我が花菖蒲は荒野の庶民花であるが、貴人の高雅さが満ちあふれている。園養としては更に優麗を發し典雅をきわめ気品を生むこと他にくらべるものがない。紫白の神を翻がへした姿は名優が舞台にセリあがつてくる姿とみたい。」

1859年の横浜開港後、横浜山手の外国人居留地から、洋種園芸植物が植栽され始めました。明治23年(1890)に横浜市唐沢に植物の輸出入を扱う横浜植木株式会社設立されてから、さらに活発化し、明治から大正時代にかけて、洋蘭、バラ、ダリヤ、チューリップ、カーネーション、ヒアシンス、ゼラ

ニュームなどが続々輸入され、洋種園芸のブームとなりました。西洋文明にあこがれる舶来志向が拍車をかけたのかも知れませんが、このようなときこそ、日本に自生する植物から生まれた日本民族の伝統園芸花を見直し、改良し、発展させなければならぬという気概から、井下先生たちが中心となって日本花菖蒲協会を創立したのでしよう。前記のように、さくら、梅、菊、蓮の会も設立されたよう

で、先生が東京市公園課長の立場であったことからして、国産植物振興を目的とした、官による指導、協力もあつたものと思われま

80年の長い年月をへて、現代の私たち花菖蒲園芸家も同じような環境下にあると思います。園芸世界のグローバル化で、花菖蒲の存在価値も看過されつつあります。これから90年、100年と記念日を祝うことができるよう、後輩たちを導いていかなければなりません。

井下先生（ペンネーム花守人）から喚起されたことは、花菖蒲の美の観賞と表現についてです。昨年の7月3日（金）NHK3チャンネルの「美の壺―花菖蒲」という番組に取材協力しましたが、日頃何気なく栽培している花菖蒲の美についてあらためて考えてみまされた。その結果があつた。番組に反映されて見せる凛とした芯の姿、紫から白にかけての色彩のグラデーション、微妙に移り変わる色調、剣のように鋭い葉、群生を引き立たせる濃紫など花菖蒲が表現する美は筆舌に尽くしがたいものがあります。花守人は格調高い言葉で「花菖蒲は絶えることのない地上の争鬪を冷やかに見渡し、求めよ天の栄光、醒めよ地上の煩惱からと、私たちに向かつて厳かな啓示を輝かせている」と協会会報第5号（昭和35年）の巻頭言を書いています。明治の人の開明的思索性がうかがわれる言葉です。先生の人柄について故平尾秀一会長は協会会報16号（昭和50年）の追悼文のなかで「会合には必ず定刻前にお顔を出され、米寿のお齡とは思えない若々しい口調で会長あいさつをされ。会員と楽しく語り合われた温容は、いつまでもわれわれの胸にあざやかである」と紹介されています。明治の人の高邁な人間性が偲ばれます。

## 日本花菖蒲協会創立80周年を祝して

アール・デニス・ハガー (R. Dennis Hager)

アメリカアイリス協会花菖蒲部会長  
(President, Society for Japanese Irises, Section of the American Iris Society)



日本花菖蒲協会創立80周年記念を迎えるにあたり謹んでお祝いの言葉を申し上げます。

アメリカの園芸家たちにとって、花菖蒲の美しさに魅せられるだけでなく、今日観賞できるような高貴な花を作りあげてきた長年の歴史と、ノハナシヨウブ (*Iris ensata*) という単一の原種のみから育種されたということに敬服せざるをえません。まさに花菖蒲は日本が世界に与えた最も偉大なる植物といえます。

過去と現在を秤量することは難しいのですが、日本花菖蒲協会の歴史を回顧するとともに、未来について展望することも大切です。過

去の園芸家たちが成し遂げた成果に敬意をはらうとともに、私たちは来べき世代の園芸世界でもアイリス類が栽培されていくような道を求めていかなければならないと思います。植物の革新、例えばキハナシヨウブや4倍体の品種群の登場はアイリスに明日の園芸世界にも良い場を確保することに役立つでしょう。

1931年に日本花菖蒲協会が創立された経緯については「日本のアイリス」と題して、アメリカアイリス協会の会報にも掲載されています。この記事は英文で書かれた最初の包括的な報告書として画期的なものです。

日本花菖蒲協会の英文による発表のなかで、特に創立70周年記念号の記事は親切にインターネット上にも掲載されました。花菖蒲は日本が世界に与えた贈り物でありますが、このような形による刊行は日本花菖蒲協会が英語を話す世界に送った贈り物でもあります。私たちは心より感謝します。私たちが共通のゴールにむかって努力しますので、日本花菖蒲協会が成功のうちに続いていきますよう願っています。

(日本語訳・椎野)